

しこな異変

言語時評・十一

琴といい和歌といいまた花という四股名やさしく敵を倒せる

矢後千恵子歌集『駅長』（短歌新聞社1999）

「遊びつづけて七十年」、これは、民俗学者の神崎宣武氏による小沢昭一氏の聞き語りの題である。その第三回「相撲・野球」（岩波書店『図書』2005.9）が特におもしろかった。子供時分の相撲好きは「ナミの熱中ではなかった」として、新番付が発表されると、「小さい木の名札に相撲取りの名前を書き」「釘を打った板に番付順に並べて下げ」

工藤力男

「取組表ごとに入れ替え」「毎日ラジオにかじりつきながら勝敗に一喜一憂した」。おりしも双葉山の全盛期、ひいき力士は鯨ノ里であつたという。

東京育ちのうえに、国技館に潜りて入るほど筋金入りの遊び根性があつた小沢氏に比べると、みちのく秋田に育つたわたしの遊び方は平凡であつた。新聞に載つた取組表を見ながらラジオの実況放送に耳を傾け、勝敗を白黒の丸印でつけることが日課だったのである。それでも一年に数場所の放送を通して幾つかの漢字を学び、日本の地名と言葉を覚えた。名寄岩から北海道に「名寄」という町のあることを知り、数人のしこなで覚えた「錦」の文字によつて華

やかな化粧回しへの空想に導かれた。郷土力士の大蛇おろちがた湯でオロチを知り、緋ひ緋あしによって漢字「緋」とオドシという読みを学んだのである。

「しこな」の古来の漢字表記「醜名」は現代人には違和感が大きいだろうが、仮名表記では視覚印象が弱くてうもれやすい。わたしは当て字をしない方針の者だが、本稿ではやむなく「四股名」とかく。年紀は、本文中では元号、括弧内ではキリスト暦による。

加齢とともに大相撲に対する我が関心は薄れ、やがて完全にきえた。その契機は二つある。ひとつはハワイ出身の力士の入幕である。テレビでみると、重量ゆたかな彼らの相撲は、概して体重に任せて勝つことが多く、勝負に華がなくなったのである。軽よく重を制するの相撲の醍醐味であるが、技と智慧をいかに発揮しても、開きすぎた体重差はいかんともしがたい。華なくて何が日本の相撲かな。

追いつけをかけたのが、変な四股名の出現である。昭和六十一年七月場所後に大関に昇進した保志関ほしが、本名を「北勝海ほくとうみ」にかえた。保志関は北海道十勝の人なので、十勝海とつけたかった。だが、本場所は十五日制なので、北

海と十勝から一字ずつつたのだという（毎日新聞夕刊1986.7.21）。朝日・毎日の両紙はこれに「ほくとうみ」の仮名がふつてあり、放送でもそう呼んでいた。毎日新聞夕刊（1986.10.27）の四股名の特集に命名の経過は記すが、「と」のよみの由来はかいてない。こともあるように、「十勝」から「勝」の字と「十」の訓「と」をとり、出身地の広尾町が太平洋に面するので「海」の文字をそえたようだ。「勝」は、逆立ちしても「と」とはよめないが、無理が通れば道理はひっこむ。我が記憶では時の相撲協会の理事長の命名であった。新しい四股名をえた新大関の喜びの声と表情にテレビで接したが、仮に不満であっても理事長の命名には逆らえない。

同時期に横綱に昇進した立浪部屋の北尾関も四股名をもらった。同じ部屋先輩横綱、双葉山と羽黒山を合成して「双羽黒」を作ったのは協会の理事長である。おざなりの極みというほかない。それに、どう見ても双葉山の名がかすんでいる。この二力士の改名について、相撲協会内部から識者や報道関係者から、異見がでなかったのだろうか。名古屋本社版の毎日新聞にはそれを批判する投書がのつた。わたしはいたく共感し、時の横綱審議委員会委員長に、指

導力を発揮すべきだと直訴したが反応はなかった。横綱審議委員会の関与することではない、というのだろう。

時は流れて平成四年の『新潮』四月臨時増刊号に、丸谷才一・中村雄二郎・井上ひさし氏の座談会「名前のつけ方教えます」がのっている。その中に「貴花田・若花田」は安易な四股名だとある。語頭の子音ひとつの違いでよびわける無神経さをわたしも感じていた。この原理は横綱「貴の花・若の花」にうつがれた。右の座談会では「四股名審議会」の必要性までとびだしている。

毎日新聞夕刊(1986.10.27)の「しご名列伝」に、「蒙御免珍名番付」と題して、元禄年間から大正年間までの不了^{ふりよう}けん^{でこぼこ}・凸凹^{とくかく}・兎角^{とかく}・自動車^{とこしや}・寒玉子^{さむぎ}など十八をあげている。ほかに、京^{きやう}(かなどめ)・い^い(かながしら)もある。判じ物のように奇妙な四股名^{よこな}のことは熟知しているが、横綱を張った力士にそれはみえず、少年時代の記憶にもない。四股名^{よこな}がかわるのは、三十年ほど前に力士を外国に求めはじめてからではないか。トンガ王国の若者四人の来日が転機になったように思つ。彼らの四股名は、国王じきじきの命名による「南の島・福の島・日の出島・椰子の島」である。特に

「南の島」が異様である。

四股名の北と南を比べるとその違いがよくわかる。飯田昭一編『史料集成 江戸時代相撲名鑑』(日外アソシエーツ2001)によると、「北^{きた}」で始まる四股名は十八種類、力士は三十四名であるのに対して、「南^{みなみ}」で始まる四股名は「南川・南崎・南嶋」の三種類、力士も三名にすぎない。これは、キタが二拍であるのに、ミナミは三拍と長くて四股名の作りにくいことがある。「南の島」の異様さはそれ^{それ}に由来する、とわたしは考えている。

それだけではない。日本人の多くが「南」に対していく印象が関与しているに違いない。南は明るく楽しく甘美な方角で、かつて新婚旅行の行き先は南と相場がきまっていた。それに対して、「北」は暗く寂しく峻厳な印象を与え、恋に傷ついた女は冬景色の津軽海峡を渡り、男は闘いに敗れると再起を期して北に帰るのであった。近年の関取にも、北の湖・北の富士・北桜・北勝鬨の名はあるが、「みなみ」のつくものはない。

日本相撲協会は、大相撲を国技と称し、日本の伝統文化であると広言する。それなのに、およそ日本語らしからぬ四股名を許したのである。おざなりな四股名を贈られた双

羽黒は親方といさかいして一年余で廃業した。変な四股名を負わされた北勝海は五年余り土俵を勤めた末に引退した。わたしは不快な四股名が目耳に触れないことを喜んだが、このごろの番付に、その弟子らしい「北勝力・北勝岩」があり、ホクトウミと読んでいる。部屋屋の負の伝統をうついでいるのである。右にひいた改名時の新聞記事でもわたしの記憶でもホクトウミであるが、『大相撲人物大事典』（ベースボール・マガジン社2001）の「全幕内力士名鑑」にはホクトウミとある。いつ何ゆえに変更されたのか。

これを手始めに、近年の番付から変な四股名を拾うと、まず戦鬨^{せんとう}・闘牙^{とうぎ}・追風海^{はやてうみ}・琴光喜^{ことみつき}がある。この三月場所の番付のうち、大翔大・豊真将に至っては、読み方の見当さえつかない。世界じゅうから力士の卵をみつ付けてくる時代なので、漢字の読み方の日本語離れも可なり、と協会は考えているのかもしれない。

二所ノ関親方（元大関・佐賀ノ花）が、愛弟子・納谷幸喜^{なやこうき}の非凡な才能を見ぬき、大成を祈って贈った四股名は「大鵬」。日ごろ愛読する漢籍からとったという。多分『莊子』逍遙遊篇であろう。近年、横綱への推挙をしらせる使者がきたとき、受け手は難しい四字熟語を交えた礼をのべ

る習慣がある。あれは自分で考えるのだろうか。心・技・体そろって初めて横綱なのだから、横綱を狙う力士は古典の勉強で心も鍛えるべきである。

右のような事情で今のわたしは大相撲に全く関心がないので、実況放送も見聞きせず、新聞もよまない。それでもニュース放送などで四股名を耳にすると、近年、ひとつの変化がおこっているように感じられてならない。本年三月場所の番付でいうと、まず春日錦と高見盛である。日本語音韻論で特殊拍と称する、小さなツでかかれる促音、ンでかかれる撥音、長音、二重母音の後半の音は、その前部分と一緒に発音されて「音節」と解釈される。タカミサカリとカスガニシキには、これらの特殊音が含まれない。拍で数えても、音節で数えても六つ、先の「南の島」と同じく長いのである。

特殊拍を含んで長い四股名はすいぶん多い。幕内力士だけでも、アサセキリユウ（朝赤龍）・北勝力^{ほくとうりき}・琴奨菊^{ことしょうきく}は六拍で五音節、アサショウリユウ（朝青龍）・千代大海^{ちよたいかい}・琴欧州^{おしゅう}・旭天鵬^{あしたほう}・旭鷲山^{きよくしゅうざん}・時天空^{ときてんくう}は六拍で四音節である。名横綱と伝えられる谷風、双葉山、我が少年期に親しん

だ横綱では、羽黒山、照国、前田山、鏡里、吉葉山、栃錦、比較的近く名声を轟かせた大鵬、北の湖、千代の富士、引退して日の浅い曙、武蔵丸、貴の花などに五拍をこえる四股名はない。長い四股名としてうかぶのは力道山^{りきどうさん}だけである。これは六拍で四音節。今はこの手の四股名が大流行していることになる。

四股名は時流に影響されることがありうるが、年寄名跡にはその影響が多くないと思うので、現在の百五の年寄名跡をみると、時津風・武蔵川・片男波など、長くても五拍どまりで、それ以上の長さのものは一つもない。つまり、四股名は五拍以内に収まる伝統だったのではなからうか。それは特に約束とか決まりとかいうことではなく、日本語の音韻構造・語構造の特徴から、一息に呼ぶ名としてはその長さが最も自然だったのだと思う。

これは自分だけの感覚かも知れないので確かな数値がほしい。上引の「全幕内力士名鑑」は、江戸時代の勸進相撲草創期から活躍した主な力士、江戸相撲興業に参加した宝暦七年十月場所以降の幕内力士、明治大正期の東京相撲入幕力士、昭和平成の入幕力士まで、約千五百名の足跡とプ

ロフィールを、十四の時期にわけて収めている。その結果を一覧表にして示し、参考のために、本年三月場所の番付から幕内力士の数値をそえる。時期の欄の丸数字と星印の実際は左記のとおりである。なお、この名鑑には、文化年間を二分した根拠を明記してないが、雷電為右衛門の引退した文化八年閏二月場所までを区切りにしたようだ。

宝暦以前
寛政／文化年間
天保／慶応年間
明治十七年／三十三年
明治四十二年／四十五年
昭和期戦前
昭和四十年／六十三年
平成十八年三月場所

宝暦七年十月場所以降
文化／文政年間
明治元年／十六年
明治三十四年／四十一年
大正年間
昭和期戦後／三十九年
平成元年／十二年

時 期	全 力 士 数	六 拍 以 上	六 音 節
	51	0	0
	101	1	0
	96	0	0
	70	1	0
	127	2	0
	46	0	0
	81	0	0
	52	0	0
	32	1	0
	92	2	0
	142	11	3
	167	16	3
	159	10	1
	94	17	3
*	42	11	2

これによると、昭和期には長くなる傾向が始まっていたことになる。それでも平成期の比率は特に大きいので、わたしの直感が大きく外れていた訳でもないようだ。念のために以降の六音節の四股名をすべてあげる。松前山は襲名によるもので同名異人である。

大和錦・松前山・櫻錦、 若杉山・東錦・松前山、
黒姫山、 北勝関・旭豊・高見盛、*春日錦・高見

盛（の再出）

ついでに『史料集成 江戸時代相撲名鑑』もみよう。その上巻には、貞亨元年から明治元年までの百八十五年間にわたる、約二万一千弱の名があがっている。木村・式守両家の行司名三千人ほどを除く力士数は約一万九千人になる。そこから拾った六拍以上の四股名は百十七、同名が百ほどあるので、約二百二十人が該当する。昔の四股名はどこまで考えられたか疑わしい者もある。例えば安政・文久年間の「四月朔日」三人にシガツツイタチの仮名がついている。はたして本当にそう呼ばれたのだろうか。ワタヌキではなかるうか。「湊島山」「りん関山」「湊ル前」などは正確さの保証に不安が残る。また、この名鑑は出釈迦山しゅつしやを六拍のシユツシヤカヤマとしているが、先の大事典には五拍のシ

ユシヤカヤマとある。正式名称は前者の六拍でも、実際には後者の五拍でよばれたのかもしれない。さきに変な四股名とした「戦闘竜」せんとうりゅうは、文字のままよむと六拍で四股名の伝統にはずれるので、それをさけて「闘」のトウを短呼したのかもしれない。逆に、ホクトウミは五拍であるが、近年の傾向にそって六拍五音節のホクトウミにかわったのであろうか。

敗戦後に顕著なこの現象の背景は何だろうか。原因として考えられるのは二つ。日本人が早口になったのか、日本人の発音が変化したのか。

日本人の話し方が早口になったとは、五十年來いくたびが見聞きしたことだが、勿々の調べでは確かな数値がえられなかった。早いものでは、日本放送協会編『ことばの研究室』（1950）の座談会で、劇作家の飯沢匡氏が「十年前と今ではまるでスピードが違いますね」と語っている。『言語生活』（1975）「昭和のことは五十年」特集の座談会で、一人が「非常に早口になった」といって、別の一人が「すごく早くなっ」た、一分間に四百字以上よむのではないかという、日本放送協会の青木アナウンサーは、二

ユースをよむ速度は大体一分間に三百字で、ディスクジョッキーなどは早口を売り物にしているという。

『国語年鑑』を遡ってそれを確認しようとしたが、早口に言及したのは、さらに六年後の土屋信一氏の展望(198)だけであった。土屋氏はその冒頭を「早口の時代」として、いろいろな発言を紹介している。いわゆるしゃべくり漫才全盛期である。近いものでは、杉藤美代子氏が『言語』(1999.9)で、当時の早口を認め、アナウンサーがニユースをよむ速度を比べ、間の取り方によっても聞き手の感じ方が違うことを指摘している。最上勝也氏も同誌上で、三十五年間にわたるニユースの発話速度の経年変化を示しているが、人・時間帯・内容が異なるなど、条件がかわって簡単には比較できない。

タカミサカリ・キタカチドキ・カスガニシキは六拍・六音節だが、早口なら一息によべるというのだろうか。

教室でわたしが日本語の音韻の特徴を説明するとき、学生が既に学んでいる英語を対照に用いることが多い。現代日本語の音韻は、発音の単位を等時性におき、それを「拍」とか「モーラ」とか称する。日本語の定型詩の五七

五とか七七とかいう音数律は、拍で数えたものである。英語の発音は、母音と、時に成節的子音 $n \cdot l$ などを核にしたまとまり「音節(シラブル)」を単位とする。両言語は音韻構造がこのように異なる。例えば、セイジョウウダイガクは八拍であるが五音節である、といった話をするのである。もつとも、東北地方、九州南部などには、英語のように音節単位で発音する地域があり、わたしもその地域で育ったのであるが。

それに加えてよく使う材料に、金田一春彦氏の講演記録の一節がある。今その写しが見あたらないので、同氏の『日本語新版(上)』(岩波新書)から同じ話をひく。ハワイ大学で日本語を講じたときの経験談である。一学生が俳句を作ったといってもってきた。「村雨や晴れて雀の討論会かな」とあった。電線にでも止まった数羽の雀のさえずる様子でも詠んだのだらうと思う。下五は八音になる、と金田一氏がいうと、その学生は納得せず「トウ ロン カイ カナ」と数えたというのである。最後は多分「カーナ」と伸ばして発音したのだらう。

アサセキリユウなど六音節五拍以内の四股名の流行は、日本語を英語のように、音節として発音する傾向の兆しと

解釈することもできる。

本稿は、四股名という小さな窓から覗きみた現代日本語の一断面である。前半に述べたのは人為的な変化、というよりも意図的な改変であり、日本文化にとってゆゆしいことだと考える。後半のそれは自然な言語変化だといえよう。この半世紀間に日本語の発音に構造的な変化が生じているのかもしれないが、四股名の変化に着目した言説にはまだ接していない。これが日本語全体に及んでゆき、やがて「メロン食へば子ら思ひいづる十三夜かな」が、字の余りが一つもなき句といわれるようになるのだろうか。

(二千六年春)

【追記】 去りし五月八日の七時前、第一放送「ラジオ朝一番」の「今日はなんの日」で、女性アナウンサーは、横綱北勝海が引退を表明した日であることを言い、明瞭に「ホクトウミ」と発音した。わが記憶の中の読みと同じである。(再校に際して記す)